

# 家庭内における日中の謝罪言語行動 —ホームドラマの謝罪談話の分析—

李 竺楠

## Apology acts in Chinese and Japanese in home situations: Analysis of the apology discourse in television dramas

LI, Zhunan

### Abstract

In this research, I investigated apology acts in home situations observed in Chinese and Japanese television dramas, by making comparative examinations of the frequency of apology acts, the types of unpleasant conditions inducing apology, and the strategies for an apology.

As for the frequency of apology acts, I found that Japanese people in the Japanese dramas tend to apologize more frequently than Chinese people in the Chinese dramas, which supports the stereotypical image of the Japanese and the Chinese, such as “the Japanese apologize easily and formally, but the Chinese don’t”.

About the unpleasant conditions for apology, Chinese people are described to give special consideration to family members who are not so close. On the other hand, the Japanese give importance to close relationships within the family structure. This contrast may be from the difference in family configuration.

About the apologetic strategies, regardless of the strength of bond among members, Chinese people use more types of strategies than Japanese people. And there are differences in the choice of strategies, even though they are in the same type of unpleasant condition; the “responsibility approval” strategy seems to be used most frequently by the Chinese, while the “explicit apology” is preferred by the Japanese. It appears that there are different “expectations” for apology between Chinese and Japanese society.

In previous studies, the stereotypical difference in apology acts between the Japanese and the Chinese has been considered to originate from the polysemy of apology expression. In addition, my results suggest that the difference of understanding “unpleasant conditions” as the premise of apology and “apologetic strategies” as the means of apology is also a cause of the stereotypical image of the Chinese and the Japanese.

**Keywords** : apology, stereotype, frequency, unpleasant conditions, strategy

### 要旨

本研究は、ホームドラマを素材として、家庭内の人間関係に焦点をあて、日中の謝罪言語行動を、謝罪が行われる頻度、その前提となる不快状況、さらに謝罪に使われるストラテジーの各側面から分析した。

謝罪行為の頻度については、家庭場面においても、日本人のほうが中国人よりも頻繁に謝罪する傾向が見られ、先行研究で指摘されてきた「謝る日本人、謝らない中国人」というステレオタイプを支持する結果が得られた。

不快状況については、家庭内では中国人は疎遠関係の相手により注意を払って謝罪行為を行うが、日本人は親しい相手をより重視するように描かれており、日中の家族形態の違いがその背景にはあ

ると考えられる。

謝罪ストラテジーについては、関係の親疎に関わりなく、日本人より中国人のほうが多種類のストラテジーを使っていることがわかった。その中で、中国では「責任承認」、日本では「明確な謝罪表明」がもっとも頻繁に見られたストラテジーであり、同じ不快状況でも日中の中で重要視されるストラテジーが異なるという結果を得た。この違いは、謝罪の受け手の間に日中で異なる「期待」が存在することによるのではないかと考えられる。

以上の分析結果から、「謝る日本人、謝らない中国人」というステレオタイプは、日中の謝罪の定型表現の多義性の有無に起因するのではないかと先行研究では指摘されていたが、それに加えて、謝罪の前提となる「不快状況」、また謝罪の手段としての「ストラテジー」についての認識の異なりが原因である可能性も本研究の結果からは示唆された。

キーワード：謝罪、ステレオタイプ、頻度、不快状況、ストラテジー

## 1. はじめに

中国語話者と日本語話者の間で生じるコミュニケーションの問題には、謝罪行為に関するものが多く見られる。一般的には「謝る日本人と謝らない中国人」というステレオタイプが定着しているように思われるが、その一方で「謝らない中国人像」に疑問を抱き、「中国人も謝るときは謝る」、「中国人は行為を重視し、言動の一致を求める」などの異論もある（高橋、2005b：231）。では、「すぐに謝る日本人」と「謝らない中国人」は現代の日中の日常生活、とくに一般に親しい人間関係である家族の間においてもそのとおりなのだろうか。本研究では、テレビドラマにおける家庭の場面の談話を資料に、謝罪行為の生じる頻度、状況、またその際に使用されるストラテジーの面から考察することによって、家庭内において日中の謝罪行為の特徴を明らかにするとともに、日中の謝罪に関するステレオタイプの妥当性を検証することを目的とする。

## 2. 先行研究と研究の目的

日中の謝罪行為を対照的に分析した研究には、謝罪の言語表現の使用や謝罪ストラテジーのあり方の異同に関するものが多く見られる。

謝罪の表現面の問題は、日中の代表的定型表現である“对不起”と「すみません」の異なりが指摘されてきた。陶（2005a）や高橋（2012）は、日本語の「すみません」は感謝を意味する場合もあり多義的であること、一方中国語の“对不起”は謝罪以外の意味はないことを論じたが、これらのことが日中の謝罪行為への印象の違いを形成する可能性が考えられる。

つぎに日中で好まれる謝罪のストラテジーをみると、中国語話者は問題の状況が生じた理由の説明、その補償への言及など「問題への対処」の表明や関係修復ための行為を重視すること（陶2005b, 高橋2005a, 鄭2006c）、そのことが定型以外の表現を駆使する言語行為につながると考えられる（蘇2007）。その一方で、日本語話者は相手との社会関係に関わりなく定型表現による「謝罪の表明」が多いことが指摘されている（佐竹2005；王2009；趙2012, 2014a, 2014b）。これらの点も日本人は「すぐに謝る」、中国人は「なかなか謝らない」というイメージにつながる。

これらの研究では、固定された場面において謝罪の言語行為をとらえている点、またそのとき生じる言語的形式と謝罪の意を伝える方策に焦点が当てられている点の特徴である。しかしながら、現実の場面では、謝罪が発生する場面的要因（たとえば謝罪の理由や謝罪の受け手との社会関係など）は多様であり、またどの程度の頻度で謝罪行為が見られるのかについての情報はほとんど語られていない。

そこで本研究では、家庭という日常生活の場面において、家族間に見られる謝罪の頻度、状況、およびストラテジーにどのような異なりが見られるかを検討することを通して、日中それぞれの謝罪言語行動の特徴と両者の差異をさらに明らかにし、謝罪に関するステレオタイプのイメージの検証を行う。

### 3. 研究方法

先行研究で指摘されてきた「謝る日本人、謝らない中国人」というステレオタイプは、あくまでも経験からの印象に過ぎず、実際にはそのようなことが存在するかどうかについての実証的研究は、筆者の知る限りまだなされないままである。その原因の一つは研究方法にあると考えられる。これまでの先行研究は質問法によるものがほとんど<sup>1</sup>で、事前に設定した謝罪場面において被調査者の回答を得るのが一般的な手順である。しかし、場面を設定すると、その場面だけに議論が限定される。現実の謝罪はその場面の内容（または謝罪の誘因である不快状況の種類）はさまざまであろうし、場面の種類によって謝罪行為のストラテジーや頻度にも異なりが予想されるにも関わらず、検証を行うことはできない。また、質問に対する回答はあくまでも意識であって、実際の行動ではないという大きな問題も存在する。それに比べて、観察法は「ありのままの自然なデータが得られる」（萩野, 2003: 216）という点が優れている。人々が実際に言語を使うさまをとらえる言語行動の研究には、質問法よりも観察法のほうがより相応しいため、本研究は観察法による調査を採用する。

しかしながら、謝罪行動の研究においては、現実の謝罪言語行動を直接観察し、生のデータを収集することは非常に難しい。なぜなら、多くの場合、謝罪が必要とされる事態がいつどこで生じるかは予測できない。そこで、本研究では、テレビドラマの談話をデータとして使うことにする。テレビドラマを選んだのは、それが、現実をもとに作られ、その中の談話や発話行為が生じる状況は現実のものに近似している；コンテキストがあり、言語行動の意味を特定しやすい；比較的入手が容易で、短時間に多数の用例が収集できる；などからである（北山, 2014: 25）。その一方で、テレビドラマはあくまでもフィクションであること、ときには誇張された描き方が言語表現に何らかの影響を与える可能性があること、会話の聞き取りに限界があることなど、自然談話のデータとの異なりには十分注意して利用すべきであることは言うまでもない。

### 4. 本研究の理論背景

言語研究における「謝罪」というテーマは、1970年代以降に欧米を中心に盛んになった発話

1 具体的には質問紙調査（王, 2009；高橋, 2005a；2005b；蘇, 2007；趙, 2012；2014a；2014b；彭, 1992；鄭・他, 2005；鄭, 2006a；2006b；2006c）、談話完成テスト（佐竹, 2005）などが多用されていた。

行為論や語用論の研究において重要な研究対象として浮上し、その後、語彙や表現レベルの「言語表現」研究の枠組みを超えて、対人関係の相互行為研究や社会の言語行動規範を探る研究へとその射程を広げてきている。以下では、「言語行動」と「謝罪」という2つの基本概念を社会言語学と発話行為理論に基づいて解説し、謝罪言語行動を捉える本研究の理論的立場を述べる。

#### 4.1 言語行動としての謝罪

「謝罪言語行動」は「言語行動」の下位分類の一つである。ネウストプニー (2003:2) は、「言語行動」を以下のように述べている。

言語行動は「コミュニケーション」とほぼ同じ使い方ができる。つまり、行動一般（二人以上が参加すると「インターアクション」になる）があり、それは非言語的行動（社会文化行動）と言語行動（コミュニケーション）に分かれ、またコミュニケーションは、文法外コミュニケーション行動（「社会言語行動」）と文法行動（狭い意味の「言語」）に分かれる。従来はそれぞれ、社会学／人類学、社会言語学／語用論など、そして伝統的な言語学の対象になってきた。

本研究でいう「言語行動」は、上記の「文法外コミュニケーション（「社会言語行動」）」にあたるものである。「言語行動」は、杉戸（1992:30-44）によれば、次の3つの視点から考察できる。

- ①「言語行動の種類や機能への視点」
- ②「言語行動の構成要素への視点」
- ③「具体的な言語行動の動的な構造への視点」

①は、挨拶・討論・雑談などまとまりのある言語行動、およびその中に現れるあいづち、呼びかけ、応答、拒否、承諾など個別的な言語行動が、どのような特徴や機能を持っているかを分析する研究である。②は、言語形式の現れ方を、言語行動の主体や相手、場面・目的・媒体・伝達内容など他の構成要素との相互関係の中で分析する研究である。③は、ほめ・感謝・謝罪・勧誘・依頼などの言語行動を含む会話や談話の、動的な展開や内部構造を詳細的に記述・分析する研究である。本研究では、謝罪の形式および謝罪を構成する要素という点においては②に基づき、また謝罪のストラテジーという点においては③に基づいて検討を行うものである。

#### 4.2 発話行為としての謝罪

「謝罪」という言語行動は、発話行為理論の主要テーマの一つとしても研究されてきた。Searle (1969) は、発話行為を記述する手段の一つとして、発語内行為を適切性条件 (felicity condition) によって捉えることを提案した。適切性条件とは、発語内行為が適切に成立するための条件であり、命題内容条件（問題の発話の命題内容が満たすべき条件）、準備条件（発話

の参与者、場面ないしは状況設定に関する条件)、誠実条件(発話者の意図に関する条件)、および本質条件(問題の行為遂行の義務に関する条件)から成る。

Searle (1969) にもとづき、山梨 (1986 : 49) は、ある行為が「謝罪」という発話行為に認定されるための適切性条件を以下のように提示した。

Apologize (x, y, P) :

- i. 命題 : P は x による過去の行為
- ii. 準備 : x は自分の行為が y にマイナスであることと信じている
- iii. 誠実 : x は自分の行為を悔いている
- iv. 本質 : x は自分の行為に対するその気持ちの表出  
(x : 話し手, y : 聞き手, P : その発話に内包される命題内容)

つまり、話し手 x が聞き手 y に対し、その発話に内包される命題内容 P が遂行されたときに「謝罪」という発話行為が成立するということになる。

しかし、この適切性条件に関してはいくつかの問題点がある。まず、命題条件についてだが、謝罪の内容は必ずしも話し手による過去の行為ではなく、これから起こる行為についても「前もって」の謝罪が可能である。また、大谷 (2008 : 28) が Thomas (1995) を引いて批判しているように、自分の行為だけでなく「(自分に近い) 身内の行為」に対して謝罪を行うことも少なからずある。さらに、準備条件と誠実条件の「信じている」や「悔いている」気持ちについても留意する必要がある。「謝罪」が行われても、これらの心理的な側面が表面にそのまま表れるか否か(またはほんとうにこれらの気持ちがあるかどうか)は別問題である。つまり、心理的側面の判定は言語表現の現れ方だけでは判断できない。

これらの問題をふまえて、本研究は彭 (2005 : 79) の修正版適切性条件を導入する。

命題条件 : 話者 (およびその関係者) が行なった (又は行なおうとする) 行為。

事前条件 : 話者 (およびその関係者) の行為が相手に不利益を与えた (又は与えようとする)。

誠実条件 : a. 話者は該当行為に対して責任を負うことを認める。

b. 話者は命題行為について悔いを感じている。

c. 話者は相手に許しを乞い、関係修復を望んでいる。

d. 話者は該当行為の再発防止を約束する。

本質条件 : 話者は誠実条件で示された意向を表明する。

山梨 (1986) と比べ、彭 (2005) では話し手 x の範囲を話者からその関係者まで、謝罪の内容を過去の行為から未来の行為まで広げ、また誠実条件で示された謝罪の心理 (責任・後悔など) も詳しく取り込んでいる。

### 4.3 不快状況

しかしながら、上記の適切性条件の立場からみて、先行研究においては、「誠実条件」（謝罪心理に関する研究）と「本質条件」（謝罪の言語表現・ストラテジーに関する研究）に主な関心が置かれ、「命題条件」と「事前条件」については陶（2005a；2005b）だけが取り上げている。ただし、陶（2005a；2005b）の研究では、「何について謝るのか」という謝罪場面についての考察は行われたとしても、それが謝罪研究の中での位置付けがどうなのかについての言及はなかった。

本研究では、前節で述べた謝罪の4つの適切性条件のうち、「命題条件」と「事前条件」による状況を合わせて、謝罪の前提となる「不快状況」として考察する。すると、この「不快状況」は、「命題条件」に関して生じるものが「話し手による不適当な行為」、 「事前条件」に関して生じるものが「相手への損害」と、大きく二つに分けられる。

陶（2005b：35）は、「相手への損害」は「所有物の破損・汚れ・なくなるなど」、「身体（怪我・殴るなど）」、「精神的動揺（心配・怒りなど）」、「迷惑・面倒」の4つに分けたが、「所有物の破損・汚れ・なくなるなど」と「身体（怪我・殴るなど）」の2つは目に見える物的な損害という点で共通する。一方、「精神的動揺（心配・怒りなど）」と「迷惑・面倒」はともに目に見えない精神的な損害である。そのため本研究では、「相手への損害」は「物的」と「精神的」の2つの負担ととらえることにする。

「話し手による不適当な行為」の場合については、陶（2005b：35）では中田（1989：192）の分類に基づいて、「不適当な発言」、「誤解」、「訪問・待ち合わせ（遅刻など）」、「不作法・非常識な行動」、「不注意」、「間違い」、「犯罪・規則違反」、「義務を果たさない／果たせない」、「相手に申し訳ない（顔向けならない）」、「期待を無にする・裏を切る」、「能力・ものが足りない」、「支援をしない・手伝ってあげない」、「物・返事を返すことが遅れる」、「忘れたこと」の14の行為に分類し、さらに「断りに添えて」、「否定・不同意に添えて」、「弁解・釈明」、「依頼に添えて」、「注意喚起」、「社交辞令」、「儀礼」、「忠告・助言」、「申し出」、「確認」、「追認」、「皮肉・冗談として述べられる陳謝」の12を謝罪が生じる「場面」に加えている。

しかしながら、これらの「場面」は謝罪表現の使用により遂行される具体的な「行為」と見なすこともできる。また、これらの「行為」は相手の領域に侵入するフェイス侵害を避けるネガティブ・ポライトネスによるものと判断される（Brown & Levinson：1987）。そのため、本研究では、「不適当な行為」は何らかのダメージを与えた場合だけでなく、与える可能性がある場合も含めて広くとらえることとし、これら12の「行為」は「不適当な行為」の中に含めて考えることとする。

その上で、陶（2005b：35）が挙げた14の「実現した不適当行為」と12の「未実現の不適当行為」を整理し、さらにB-9虚言とB-10感謝代替の2つを加えて、表1のように12の行為を仮定する。そうすると、本研究における「相手への損害」は、「物的損害」と「精神的負担」の2つ、「話し手による不適当な行為」は、「暴言失言」、「礼儀違反」、「間違い」、「規則違反」、「約束違反」、「期待未満」、「信頼失墜」、「前置き」、「虚言」、「感謝代替」の10の行為である。ただし、本研究のデータでは、「間違い」の用例が出現しなかったため、今回の分析対象から外すことにする。

表1 本研究における不快状況の分類

陶（2005：35）における謝罪場面	本研究における不快状況の分類
<b>A 相手への損害</b>	
A-1所有物の破損・汚れ・なくなるなど	A-1物的負担
A-2身体（怪我・殴るなど）	
A-3精神的動揺（心配・怒りなど）	A-2精神的負担
A-4面倒・迷惑	
<b>B 話し手の不適当な行為</b>	
B-1不適当な発言	B-1暴言失言
B-3訪問・待ち合わせ（遅刻など）	B-2礼儀違反
B-4不作法・非常識な行動	
B-13もの・返事を返すことが遅れる	
H 社交辞令	
I 儀礼（辞去する際や腰を下ろす時の「失礼しますなど」）	
B-2誤解	B-3 間違い
B-5不注意	
B-6間違い	
B-7犯罪・規則違反	B-4規則違反
B-8義務を果たさない／果たせない	B-5約束違反
B-14忘れたこと	
B-9相手に申し訳ない	B-6期待未満
B-10期待を無にする	
B-11能力・ものが足りない	
B-12支援をしない・手伝ってあげない	
B-10裏切る	B-7信頼失墜
C 断りに添えて（「申し訳ないんだけど……」など）	B-8前置き
D 否定・不同意に添えて	
F 依頼に添えて（「すまないけど、…して下さい」など）	
E 弁解・釈明	
G 注意喚起（話しかける時の「すみません」など）	
J 忠告・助言	
K 申し出	
L 確認（名前を聞く）	
M 追認	
N 皮肉・冗談として述べられる陳謝	
（陶2005には掲載なし）	
（陶2005には掲載なし）	B-10感謝代替（感謝の代わり）

#### 4.4 謝罪ストラテジー

4.3で述べた謝罪の「本質条件」、つまり不快状況が生じた（または生じる）ときに、どのような言語表現を用いて関係修復をするかは、謝罪表現および謝罪ストラテジーの研究になる。先行研究では、謝罪表現と謝罪ストラテジーを分けて論じた場合が多い<sup>2</sup>。しかしながら、謝罪の言語行動はさまざまな謝罪表現によって実現されており、またその謝罪表現の選択は背後のストラテジーによって影響を受ける。謝罪に使われる言語表現の違いは、基本的には謝罪ストラテジーの相違に起因すると言える。そこで、本研究では、謝罪表現と謝罪ストラテジーを合わせて考察する。

本研究では、陶（2005b：40）の人間関係修復のための方略および池田（1993：15）の謝罪ストラテジーの分類を参考に、日中の謝罪のストラテジーを以下のように分類した。各ストラテジーに対応した日中の謝罪表現の例も併せて示す。

##### 【明確な謝罪表明】

謝罪の慣用表現を発する

(日)「ごめんなさい」、「すみません」、「申し訳ありません」など

(中)「对不起」、「不好意思」、「抱歉」など

##### 【責任承認】

明示的に自分の行為の責任を認める、または謝罪の対象とする内容や事実を述べる

(日)「悪かったね」など

(中)「是我不好」（私が悪かった）など

##### 【説明・弁明】

謝る対象の事柄が生じた経過や理由の説明、および故意ではないことを述べ立てる（下線部分）

(日)「なかなかすいません。タイミングがあれで。」など

(中)「我不是故意的」（わざとではなかった）など

##### 【補償の申し出】

損失の埋め合わせを提案し、謝罪の意志を示す（下線部分）

(日)「どうもすいませんでした。あの、もし虫歯あったら、いつでも治してあげるからね。」など

(中)「对不起。我回来晚啦。我马上来帮忙。」（ごめんなさい。帰りが遅くなった。すぐに手伝いに来る。）など

##### 【処罰の申し出】

謝罪の送り手が自ら処罰されて相手と同程度のダメージを受けることで相手への補償をする。中国語では特に顕著。

2 ここは「2. 先行研究と研究の目的」を参照されたい。

(中)「你觉得骂出来舒服一点儿, 那你就骂吧。」(私を罵ったら気持ちが楽になると思うなら, 罵ってください。) など

#### 【今後の意向表明】

「再発防止の約束」や「改善策の提示」を行う

(日)「以後, 気を付けます」など

(中)「我保证下次不会再犯同样的错误了」(次は同じミスをしないよう約束する) など

#### 【反省の意思表示】

自分が起こした不快状況を意識し, 改めることを表明する

(日)「反省します」など

(中)「我会反省的」(反省します) など

#### 【相手への配慮】

損害を受けた相手に対し関心を示し, その精神的ダメージを緩和する

(日)「大丈夫ですか」など

(中)「叔叔, 阿姨, 你们别生气<sup>3</sup>。」(おじさん, おばさん, 怒らないでください。) など

#### 【許し乞い】

直接相手に許しを求めることで人間関係を回復しようとする

(日)「許してください」など

(中)「请你原谅我」(私を許してください) など

#### 【相手の攻撃弱化】

謝罪の対象の内容や事柄を疑問視する, 話題をそらせるなどで謝罪行為を避ける(下線部分)

(中)「我就开个玩笑。对不对。对不起。」(冗談だよ。すみません。すみません。)

## 5. データの収集と分析

### 5.1 ホームドラマの選定

本研究では, 家庭内の人間関係の中で謝罪言語行動を考察するため, 家族や家庭内の出来事をテーマとした「ホームドラマ」から謝罪談話を集めることにする。また収集する素材の表現レベルの均質性を保つために, ストーリーが主に大都市を舞台に展開されるもの, 製作年や時代設定が2010年以降のものに限定する。これらの条件を満たしたホームドラマとして取り上げたのは, 中国の場合は『媳妇的美好时代』(『彼と私と両家の事情』)(2010), 日本の場合は, 『最後から二番目の恋』(2012), 『ゴーイングマイホーム』(2012), 『最高の離婚』(2013)の3本である。各ドラマの詳細は次の表2及び図1-1～図1-4である。日中では違った数のドラマを選ん

3 「你们别生气」は【許し乞い】のストラテジーである可能性も否定できないが, ここでは, マイナスな情緒としての怒りを鎮めることで, 相手にはプラスになる立場から考えて, 【相手への配慮】に分類した。

だのは、合計の放送時間をほぼ同じにするためである。

表2 研究対象としての日中のホームドラマ※

国	作品	放送期間（年・月・日）	回数	放送時間（分）
日本	『最後から二番目の恋』	2012.01.12～03.22	11	523
	『ゴーイングマイホーム』	2012.10.09～12.18	10	533
	『最高の離婚』	2013.01.10～03.21	11	534
	合計	—	32	1590
中国	『媳妇的美好时代』	2010.03.29～	36	40
	合計	—	36	1440

※日本ドラマのDVDは『最後から二番目の恋』（ポニーキャニオン2012.07.18）、『ゴーイングマイホーム』（ポニーキャニオン2013.03.06）、『最高の離婚』（ポニーキャニオン2013.07.17）である。中国ドラマ『媳妇的美好时代』は、以下のネット視聴によるものである。

[https://www.youtube.com/watch?v=jfmvHIQxzZg&list=PLYIOEwI8\\_UcIpGHGEnQbEfpRYyPPJo0Hr](https://www.youtube.com/watch?v=jfmvHIQxzZg&list=PLYIOEwI8_UcIpGHGEnQbEfpRYyPPJo0Hr)

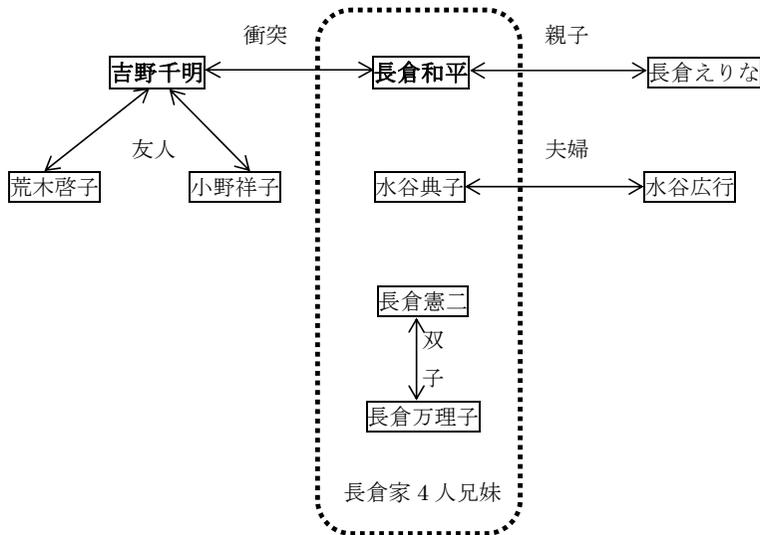


図1-1 『最後から二番目の恋』登場人物相関図

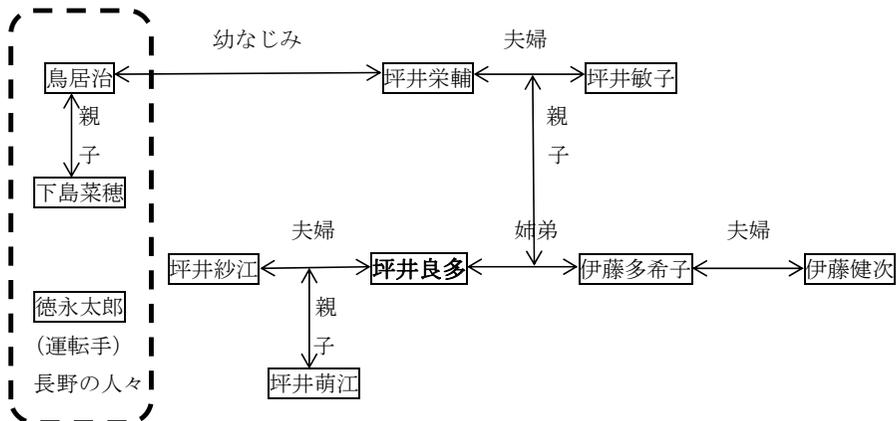


図1-2 『ゴーイングマイホーム』登場人物相関図

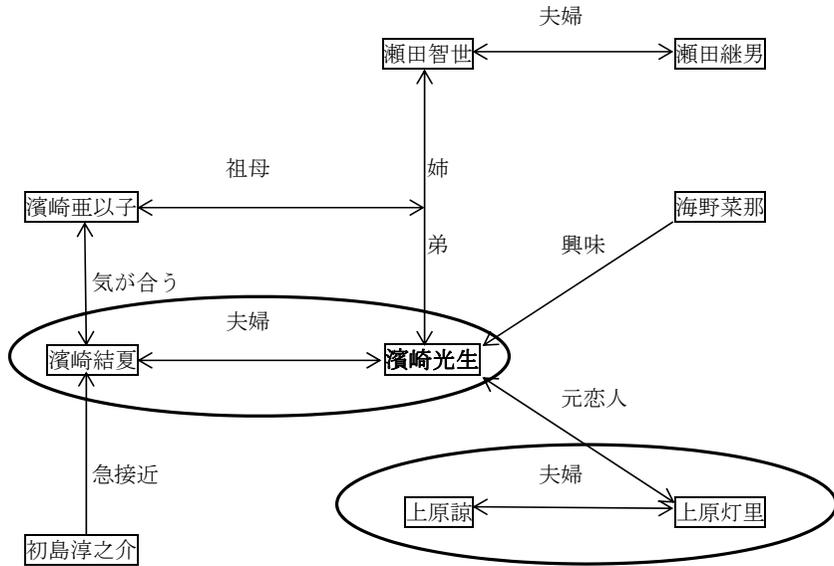


図1-3 『最高の離婚』登場人物相関図

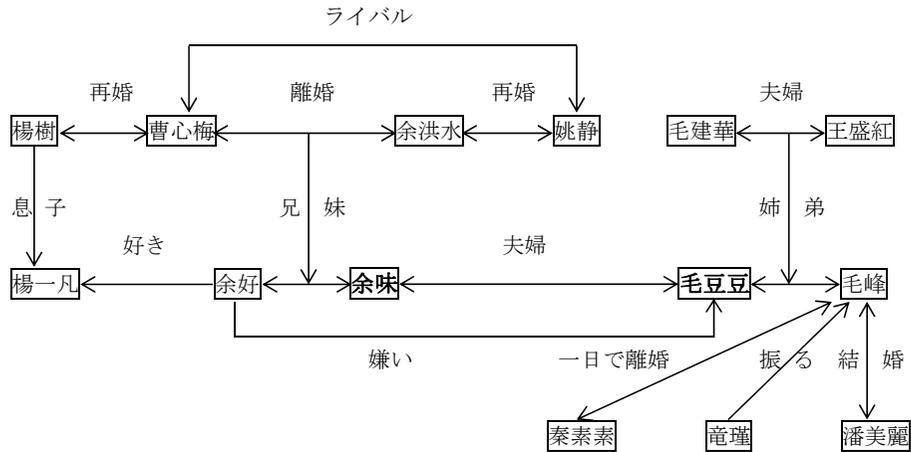


図1-4 『媳婦的美好时代』登場人物相関図

## 5.2 謝罪談話の抽出

談話を基本的な分析対象とするにあたって、まず談話をどう捉えるかという問題から始めなければならない。茂呂 (1999) が言うように、談話とはひとまとまりの現実のことばであるが、本研究ではその構造面と内容面から、以下のような基準を満たす「ことばのつらなり」を談話として考える。

- ①話し手と聞き手が特定できること。
- ②話し手と聞き手によるインターアクションが一回以上であること<sup>4</sup>。
- ③ある話題を中心に展開されること。

4 携帯メッセージによるコミュニケーションの場合を除く。

- ④次の談話との間に明確な切れ目が存在すること。  
 ⑤談話が現実のものであること<sup>5</sup>。

これらの基準を満たしたひとまとまりのことは、本研究はひとつの「談話」という単位とみなす。本研究の考察は、家庭内の人間関係で生じた謝罪を対象とするため、すべての談話のうち家庭の場面のものを「家庭談話」として抽出した。

検討したホームドラマの談話と生じた謝罪の数は以下の表3のとおりである。

表3 日中のホームドラマの談話構成

国別	ドラマ	時間(分)	談話	家庭談話	謝罪談話	謝罪用例
日本	『最後から二番目の恋』	523	301	59	12	13
	『ゴーイングマイホーム』	533	425	166	24	29
	『最高の離婚』	534	425	150	20	21
	合計	1590	1151	375	56	63
中国	『媳妇的美好时代』	1440	843	622	37	38

※謝罪の用例が含まれる談話が謝罪談話とみなす。また、ひとつの謝罪談話の中で複数の謝罪用例が生じたこともあり、謝罪談話の他に謝罪用例の欄を立てた。

中国ドラマ『媳妇的美好时代』では、合計843の談話のうち、622(73.8%)が家庭談話である。一方、日本ドラマでは、その比率はそれぞれ、『最後から二番目の恋』は19.6%、『ゴーイングマイホーム』は39.1%、『最高の離婚』は35.3%である。全体的にも、合計1151の談話のうち、家庭談話が占める割合は32.6%(375)で中国ドラマの半分以下である。同じホームドラマでも、中国の場合は家庭内の人間関係が重点的に描写され、日本は家庭以外の場面(たとえば職場など)も多く描かれる傾向があると考えられる。

謝罪談話の出現率についても、日中では大きな差が見られる。中国ドラマでは、622の家庭談話のうち、謝罪が含まれる談話の数は37で、全体の5.9%である。一方、日本ではその割合は14.9%で、中国の2倍以上である。また、中国の場合は、合計1440分の放送時間で38の謝罪用例(約38分毎にひとつ)が現れるが、日本の謝罪用例は約25分毎にひとつの頻度で現れている。つまり、研究対象のドラマでは、中国人より日本人のほうがよく謝るように描写されていることが分かる。

### 5.3 謝罪談話の分類

家族関係とは、夫婦関係、親子関係、兄弟関係などの家族構成員間の人間関係をいう。家族構成員の間では直接的な接触(対面接触)が行われ、情緒的な結びつきが強い。本研究では、家族関係の中で重要視とされている夫婦関係、親子関係および兄弟関係の三つを親しい人間関係とみなす(以後、「親密関係」と記す)。それ以外の血縁関係または婚姻関係で繋がる親族の間の関係は、比較的疎遠な関係とする(以後、「疎遠関係」と記す)。このような親疎関係の違いによって謝罪用例を分類した結果が表4である。

5 本研究では、今現在の談話を検討するため、記憶や夢などでの談話を除く。

表 4 謝罪用例の分類

国	作品	親密 (%)	疎遠 (%)	合計 (%)
日本	『最後から二番目の恋』	13 (100%)	0 (0%)	13 (100%)
	『ゴーイングマイホーム』	22 (76%)	7 (24%)	29 (100%)
	『最高の離婚』	8 (38%)	13 (62%)	21 (100%)
	合計	43 (68%)	20 (32%)	63 (100%)
中国	『媳妇的美好时代』	15 (39%)	23 (61%)	38 (100%)

中国ドラマでは、親しい関係より、疎遠関係にある謝罪用例のほうが多い（親39%：疎遠61%）。一方、日本ドラマの場合は、『最後から二番目の恋』と『ゴーイングマイホーム』は親密関係の用例が圧倒的で、『最高の離婚』は疎遠関係のほうが多い。各ドラマの間にバラツキが見られるが、全体的には親密関係の謝罪用例が多く、中国ドラマとは逆の傾向が見られる。

中国ドラマで疎遠関係の謝罪用例が多い理由のひとつは、『媳妇的美好时代』の複雑な家族事情が考えられる。病院に勤務する看護師の毛豆豆（マオ・トウトウ）は、カメラマンの余味（ユー・ウェイ）と見合い結婚したが、母親が3人（毛豆豆の実母、余味の実母、余味の実父の後妻）、父親も3人（毛豆豆の実父、余味の実父、余味の実母の再婚相手）、それに浮気癖のある毛豆豆の弟、厳しく当たる余味の妹など両家には複雑な家族事情がある。夫婦・親子・兄弟の他に、様々な親族関係にある人間同士が絡み合って、対面接触が多い分、トラブルが起きる可能性も高くなる。

それに比べて、日本のホームドラマは、親しい家族関係を中心にストーリーが展開され、疎遠関係の家族構成員についての描写は抑えられる傾向に見える。これは中国と日本の家族形態の異なりとも関連しているかもしれない。現在の日本では、「核家族」世帯が60.5%近くを占める。一方、中国の家族は、複数の世帯からなる「複合家族」であることが多く、夫婦・親子・兄弟は勿論、それ以外の血縁関係または婚姻関係で繋がる親族も家族の範囲に入る。そのため家族構成員と見なされる者の間の接触も頻繁で、家族間の事情はより複雑なものとなりやすいと思われる。

## 5.4 謝罪用例の分析

### 5.4.1 親密関係の用例分析

親しい家族関係では、中国15、日本43の謝罪用例が見られた。これを不快状況の違いによって分類し、各状況での用例数と出現率を示したものが表5と図2である。

表 5 不快状況による謝罪用例の分布（親密関係）

不快状況	日本の用例数	中国の用例数
物的損害	2	1
精神負担	11	8
暴言失言	2	0
礼儀違反	11	0
規則違反	5	0
約束違反	1	0

期待未満	1	0
信頼失墜	2	5
前置き	5	0
虚言	1	1
感謝代替	2	0
合計	43	15

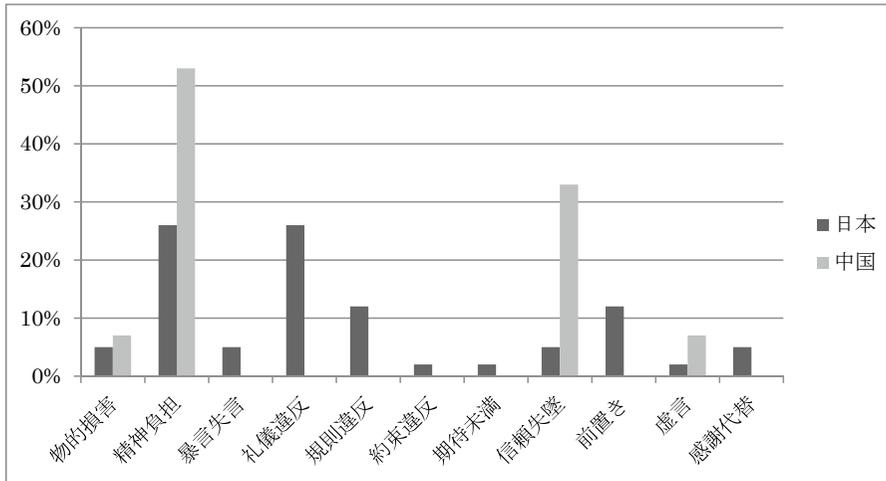


図2 不快状況による謝罪用例の分布 (親密関係)

表5をみると、日本ドラマの43の謝罪用例は11種類の不快状況、中国ドラマの15の用例は4種類の不快状況によるものと判断される。中国ドラマのものは「精神負担」(8例)、「信頼失墜」(5例)、「物的損害」(1例)と「虚言」(1例)であり、その他の7種類の不快状況は、日本ドラマでしか見られなかった。つまり、親しい関係の謝罪用例は、その数、種類とも日本ドラマに多く見られる。この結果から、夫婦や親子、兄弟のような親しい家族同士の間では、謝罪につながる不快状況は日本のほうが多く生じるのではないかと考えられる。

また、各不快状況の比率を見ると、日本ドラマの謝罪用例は「精神負担」(26%)、「礼儀違反」(26%)、「規則違反」(12%)、「前置き」(12%)の4種類が全体の76%を占めている。一方、中国ドラマの15の謝罪用例は「精神負担」(53%)と「信頼失墜」(33%)の2種類に集中している。「精神負担」で謝罪用例の出現率が最も高いのは日中の共通点だが(中国8例、日本11例)、日本ドラマでは「礼儀違反」と「規則違反」が重要な不快状況であるのに比べて、中国ドラマでは「信頼失墜」が重要な誘因として描かれている。

各用例の不快状況は、「礼儀違反」がご飯の食べ方(『ゴーイングマイホーム』第01話)、突然の来訪(『最高の離婚』第06話)、談話参加者の途中退場(『最後から二番目の恋』第9話)など、また「規則違反」は、片付け忘れ(『ゴーイングマイホーム』第01話)、洗濯物の取り出し忘れ(『最高の離婚』第01話)、朝ご飯の用意忘れ(『最後から二番目の恋』第03話)などである。一方、「信頼失墜」の場合は、夫の浮気(『媳婦的美好时代』第31, 32, 33話)である。相手に与えるダメージの大きさからみて、「礼儀違反」や「規則違反」より、「信頼失墜」のほ

うがより深刻である。つまり、日本ドラマに比べて、中国ドラマでは不快状況が深刻になると謝罪行為が誘発される可能性も高くなると言える。

つぎに、日中ともに謝罪用例が多く現れる「精神負担」の内容を具体的に検討する。家族関係の種類でみると、日本ドラマの11の謝罪用例は、夫婦関係は4例、兄弟関係は3例、親子関係は4例である。中国ドラマは8用例のうち、夫婦関係は4例、兄弟関係は2例、親子関係は1例である。横の家族関係としての夫婦・兄弟関係の数は、中国ドラマでは8例中7例、日本ドラマでは11例のうち7例である。一方、縦の家族関係としての親子関係について、中国ドラマでは8例のうち1例、日本ドラマでは11例のうち4例である。つまり、親しい家族関係において、縦の親子関係より、横の夫婦・兄弟関係の間で謝罪が多かったのは日中の共通点である。

また、親しい家族関係でどのような戦略が用いられたかについては、表6のとおりである。

表6 精神負担における戦略の利用状況（親密関係）

戦略	中国（8例）		日本（11例）	
	総回数	平均回数	総回数	平均回数
明確な謝罪表明	7	0.875	17	1.55
責任承認	15	1.875	9	0.82
説明・弁明	1	0.125	3	0.27
補償の申し出	1	0.125	2	0.18
今後の意向表明	1	0.125	0	0
相手への配慮	5	0.625	6	0.55
相手の攻撃弱化	4	0.500	0	0
合計	34	4.25	37	3.36

※平均回数は戦略の総回数と用例数の割り算で計算した数字、ひとつの謝罪用例で各戦略が何回現れたかを表すものである。

この表を見ると、中国ドラマの場合は7つの戦略が使われたが、日本ドラマでは5つである。そのうち「明確な謝罪表明」、「責任承認」、「説明弁明」、「補償の申し出」および「相手への配慮」は日中共通の戦略だが、「今後の意向表明」と「相手の攻撃弱化」の2つは日本の用例では見られなかった。つまり、親しい相手に謝罪する場合、中国人が使用する謝罪戦略の種類が多いこと、日本では「今後の意向表明」や「相手の攻撃弱化」という戦略が親しい相手に対しては使われないことなどがわかる。

また、日本ドラマでは、11の用例のうち、ひとつの談話で単一の戦略が見られたのは3つで、他の8例では複数の戦略の組み合わせによるものだった。一方、中国ドラマでは、8つの謝罪用例すべてが複数の戦略の組み合わせである。戦略の具体的な組み合わせ状況を見ると、中国の場合は、「責任承認」がほかの戦略と同時に使われる例がもっとも多い（8例中7例）。一方日本ドラマでは、「明確な謝罪表明」が単独あるいは他の戦略と組み合わせで見られた用例が11例のうち10例ある。表5に示すとおり、中国ドラマでは「責任承認」戦略の使用回数が一番多く（8用例中15回）、用例毎の平均回数は1.875で、日本の0.82より多い。日本ドラマで一番よく使われる戦略は

「明確な謝罪表明」(11用例中17回)であり、その平均使用回数は1.55で中国ドラマの0.875を上回る。これらのことから、複数のストラテジーを組み合わせることで不快状況の修復を行うのが日中の共通点である。では、具体的な用例でこの特徴を検討する(下線は筆者による)。

#### 用例1

毛 峰：姐。(姉さん)

毛豆豆：你怎么回事啊？(あなた、どうしたの?)

毛 峰：姐夫，坐这。姐夫，坐这。姐夫，来。(お兄さん、ここに座って。お兄さん、ここに座って。お兄さん、ここ。)

毛豆豆：你什么时候回来的？说走就走啊？(あなたはいつ帰ったの？勝手じゃない?)

毛 峰：喝杯东西，姐。(何か飲みなさい、姉さん。)

毛豆豆：我问你，你怎么不回家啊？(答えなさい、どうしてウチに帰らなかったの?)

毛 峰：是，姐。对，我错了。(はい、お姉さん。はい、俺が悪かった。)

毛豆豆：你知不知道秦素素在找你啊？你知不知道全家都急死了？(秦素素があなたを探しているのは知らなかった？家族みんなが心配しているのは知らなかった?)

毛 峰：我错了。我真的错了。我，我知道，我，不好。但是我今天，我有件特别好的事情要跟你们说。(俺が悪かった。本当に俺が悪かった。分かっている、俺がいけなかったのは。でも今日はとってもいいことをあなたたちに教えてあげたい。)

毛豆豆：说。(言って。)

……

『媳妇的美好时代』第04話

用例1は『媳妇的美好时代』第04話08：00～11：48の談話の一部である。毛豆豆の弟・毛峰は結婚式の翌日、妻・秦素素に手紙を残して失踪し、家族に大変心配をかけた。その後、新しい恋人を連れて戻ってきた彼は、姉・毛豆豆の怒りに対して次のように謝った。まず、毛豆豆の疑問『我问你，你怎么不回家啊？』(答えなさい、どうしてウチに帰らなかったの?))に対し、彼はすぐに『是，姐。对，我错了。』(はい、姉さん。はい、俺が悪かった。)と「責任承認」のストラテジーで素直に自分の責任を認めた。次に、毛豆豆の指摘『你知不知道秦素素在找你啊？你知不知道全家都急死了？』(秦素素があなたを探しているのは知らなかった？家族みんなが心配しているのは知らなかった?)を受けた彼は、『我错了。我真的错了。我，我知道，我，不好。』(俺が悪かった。本当に俺が悪かった。分かっている、俺がいけなかったのは。)と「責任承認」のストラテジーを3回続けたあと、『但是我今天，我有件特别好的事情要跟你们说。』(でも今日はとってもいいことをあなたたちに教えてあげたい。)と「補償の申し出」ストラテジーを使って話題の転換を成し遂げた。このひとつの談話では、「責任承認」のストラテジーが4回使われている。

#### 用例2

万理子：何だか妙なことになってしまいましたね。

典 子：あのね。きっかけはあんたなんだからね。分かってんの？  
万理子：はい。あっ、でももし今回のことがなければ広行さんは他の誰かを求めてしまった可能性もあり、むしろよかったのではないかという。  
真 平：なるほど。  
典 子：えっ？  
万理子：おなかですいてきました。  
真 平：はいはい。  
典 子：私も。  
真 平：分かった。  
典 子：いや。そうじゃなくてさ。私も登録してみようかな。何人来るかな？  
真 平：ご飯にしよっか。  
典 子：ねっ？  
万理子：手伝う。  
典 子：ちょっと話そらさないでよ。ねえ？ちょっとちょっと。  
真 平：はーあ。  
万理子：ごめん。千明さん傷つけた。  
真 平：うーん。うぎゃ。  
典 子：ねえ。万理子ちょっとどこに電話すればいいの？これ。  
真 平：よいしょ。  
典 子：もしもし？あら違う。

『最後から二番目の恋』第03話

用例2は『最後から二番目の恋』第3話11：42～12：39の談話の一部で、用例1と同じ兄妹間の謝罪のやりとりである。妹の万理子は双子の兄真平の恋人・千明の写メを出会い系サイトに使って、千明に嫌な思いをさせた。このことについて万理子は、まず「明確な謝罪表明」（ごめん）をし、その後「責任承認」のストラテジーで千明を傷つけたことを認めた。このように謝罪のストラテジーを組み合わせて使うことで兄・真平が間接的に受けた感情的ダメージを修復しようとしている。この例と同じように、まず「明確な謝罪表明」が使われているのがほかの用例でも観察できる。

#### 5.4.2 疎遠関係の用例分析

疎遠関係の謝罪用例は、中国ドラマでは23例、日本ドラマでは20例が見られた。これらの用例を不快状況の違いによって分類したのが表7である。また、各不快状況での出現率を表したのが図3である。

表7をみると、疎遠関係で謝罪が求められる不快状況の種類は、中国ドラマは8つ、日本ドラマは5つである。そのうち、「精神負担」、「礼儀違反」、「前置き」と「感謝代替」の4つは日中共通のカテゴリーだが、「物的損害」、「暴言失言」、「約束違反」、「信頼失墜」の4つは中国でのみ、「期待未満」は日本でのみ用例が見つかった。不快状況の種類は中国のほうが多く、

特に「物的損害」については日中の間で差が見られる（中国4例，日本なし）。これは5.3で述べたように，日中の家族形態の違いによるものと考えられる。今回選んだ日本ドラマは，核家族で他の世帯との接触が少ない現状を描いている。一方，中国ドラマ『媳婦的美好时代』では，主人公毛豆豆の弟夫婦は両親と共に暮らし，毛豆豆夫婦も姑と同じ家に住んでいる。このように同じ空間で生活することで，直接的な接触が多くなると同時に，物的なトラブルも発生しやすいと考えられる。

表7 不快状況による謝罪用例の分類（疎遠関係）

不快状況	中国の用例数	日本の用例数
物的損害	4	0
精神負担	10	11
暴言失言	2	0
礼儀違反	1	4
約束違反	1	0
期待未満	0	1
信頼失墜	2	0
前置き	2	1
感謝代替	1	3
合計	23	20

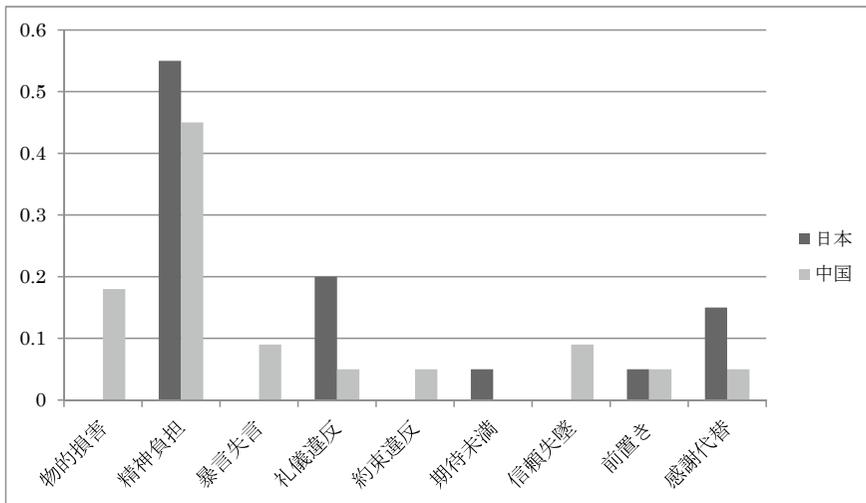


図3 不快状況による謝罪用例の分布（疎遠関係）

ここでは，日中共通の「精神負担」，「礼儀違反」，「前置き」と「感謝代替」のうち，両国ともに出現率が高い「精神負担」（中国45%：日本55%）の場面を具体的に検討する。他の3つは用例数が少ないため，今回は「精神負担」のみを取り上げることにする。

疎遠の相手に精神的負担をかけた場合，用いられた謝罪ストラテジーは表8のとおりである。

表 8 精神負担におけるストラテジーの利用状況（疎遠関係）

ストラテジー	中国（10例）		日本（11例）	
	総回数	平均回数	総回数	平均回数
明確な謝罪表明	5	0.5	12	1.1
責任承認	9	0.9	6	0.5
説明・弁明	4	0.4	0	0
補償の申し出	4	0.4	0	0
処罰の要求	1	0.1	0	0
今後の意向表明	2	0.2	0	0
反省の意思表示	1	0.1	1	0.1
相手への配慮	2	0.2	1	0.1
合計	34	3.4	20	1.8

精神負担の場面で使われる謝罪ストラテジーの種類は、中国ドラマでは「明確な謝罪表明」, 「責任承認」, 「説明弁明」, 「補償の申し出」, 「処罰の要求」, 「今後の意向表明」, 「反省の意思表示」および「相手への配慮」の8つであるが、日本ドラマでは「明確な謝罪表明」, 「責任承認」, 「反省の意思表示」と「相手への配慮」の4つしか見られなかった。全体的には中国のほうが謝罪ストラテジーの種類が多く、用例毎の平均使用回数も多い（中国3.4, 日本1.8）。また、中国ドラマの10の謝罪用例では、単独のストラテジーで謝罪が遂行されるのは1例しかなく、他の9例は2つかそれ以上のストラテジーの組み合わせである。一方、日本ドラマでは、11用例のうち5つが単独のストラテジーであり、他の6例は複数のストラテジーの組み合わせである。精神負担の場面で謝罪する際には、日本より、中国のほうが複数のストラテジーを駆使し、崩れた人間関係を修復しようとするように描かれている。

つぎに謝罪ストラテジーの組み合わせを考えてみる。中国ドラマの場合は、10例のうち7例で「責任承認」のストラテジーによるものである。一方日本ドラマでは、11用例すべてが「明確な謝罪表明」によるものであった。表8からも分かるように、中国では「責任承認」ストラテジーの使用回数が最も多く、10用例で9回現れていた。一方、日本では「明確な謝罪表明」ストラテジーがもっとも多用され、11用例中12回見られた。つまり、精神負担の場面で疎遠関係の人間に謝罪する際に、中国では「責任承認」、日本では「明確な謝罪表明」が基本的な謝罪ストラテジーであると考えられる。

では、具体的な用例でこの特徴を検討する。

### 用例3

王盛紅：美丽呀。（美丽さん。）

潘美丽：哎。（はい。）

王盛紅：你来。（ちょっと来て。）

潘美丽：哎，来了，娘。哎呦，俺又大声了。（はい，今すぐ，お母さん。あら，また大きな音を出してしまいました。）

王盛紅：没关系，下次注意。（大丈夫，今度は注意して。）

潘美丽：找俺啥事儿，娘。（何か用事がありますか，お母さん。）

王盛红：美丽，来。（美麗さん，こっちに来て。）

『媳妇的美好时代』第28話

これは『媳妇的美好时代』第28話 35：41～37：00での，姑の王盛紅と嫁の潘美麗の間の謝罪談話である。農村から嫁いできた嫁・潘美麗は家のドアを閉めるとき，ついに力を入れて大きな音を出してしまうという癖があり，その音が姑の王盛紅をいつもびっくりさせる。この用例では潘美麗が自分の行為に気づき，『哎呦，俺又大声了。』（あら，また大きな音を出してしまいました。）と「責任承認」のストラテジーだけで姑の王盛紅に謝ったのである。

#### 用例 4

修 一：お母さん。お母さん。えらいことになった。

亜以子：落ち着きなさい。

修 一：はあー。なるほどね。知らなかったのうちだけか？

結 夏：すいません。

修 一：結夏ちゃん。結夏ちゃん。結夏ちゃんのご両親は何ておっしゃってるの？

結 夏：父は怒ってます。

修 一：ご挨拶行ったか？

光 生：まだ。

修 一：お前…。大事な娘さんにこんなことして。茶畑に埋められるぞ。

光 生：えっ？

修 一：お前ら，結婚というのは2つの家族が縁を結ぶことなんだぞ。

亜以子：古くさいこと言わないで。光生と結夏さんが話し合って決めたことなんだから。

修 一：お母さん。世知辛い。この東京砂漠じゃそうかもしれませんけどね。山梨県と静岡県じゃこんな離婚認められませんよ。申し訳ないけど，引っ越しは明日に延期だ。富士宮行くぞ。

光 生：えっ。

修 一：両家揃っての家族会議だ。頂上会議だ。車出してくる。

光 生：お父さん。

亜以子：行ってらっしゃい。

光 生：俺，あした仕事だけど？

結 夏：実家に電話してきます。

『最高の離婚』第11話

これは『最高の離婚』第11話22：33～25：11の謝罪談話である。嫁の結夏が夫の父修一に夫の光生と離婚したことを伝え，その突然の事情に驚いた修一に「すいません」と「明確な謝罪表明」1つで謝っている。

以上の用例分析を通して，疎遠の相手に対して中国では「責任承認」，日本では「明確な謝

罪表明」のストラテジーがそれぞれ重要とされ、5.4.1と同様の傾向が見られる。つまり、家庭内では、親疎関係にかかわらず、相手に「精神負担」をかけた場合、中国では「責任承認」、日本では「明確な謝罪表明」が求められるのではないかと考えられる。

## 6. 考察

本研究では、ホームドラマを研究の素材として、家庭内の人間関係に焦点をあて、謝罪が行われる頻度、その前提となる不快状況、または謝罪に使われるストラテジーの側面から日中の謝罪言語行動について分析してきた。

まず、謝罪行為の頻度についてである。分析対象としたすべての談話のうち、謝罪の談話が占める割合は中国ドラマでは5.9%、日本ドラマでは14.9%と日本ドラマでの頻度が高いという結果になった。また、謝罪用例が生じる時間的割合は、中国ドラマが約38分毎に1回、日本ドラマが約25分に1回であった。つまり、家族関係を描いたドラマでは、中国人よりも日本人のほうがよく謝るように描かれていることが分かる。同じような傾向は職場ドラマにおいても観察された。李（2017）によると、中国ドラマでは、謝罪場面の割合は全場面の10%、日本ドラマではその割合は35%と中国の3倍以上である。これらの結果から、家庭・職場など現実の日常生活の重要な場面においても、日本人のほうが中国人よりも頻繁に謝罪する傾向があると考えられる。これは先行研究で指摘されてきた「謝る日本人、謝らない中国人」というステレオタイプのイメージを支持する結果であった。

また、不快状況の種類については、親密関係では日本ドラマのほうが多く（中国4種類、日本11種類）、逆に疎遠な関係では中国ドラマのほうが多い（中国8種類、日本5種類）。謝罪用例の割合からみても、中国ドラマでは疎遠関係の用例が61%、日本では親密関係の用例が68%と、多数を占める種類の異なりが見られる。この結果から、家庭内で中国人は親密関係より疎遠関係の相手により注意を払って謝罪行為を行うが、日本人は親しい相手をより重視するように描かれていると言える。その背景には、5.3で指摘したように、日中の家族形態の違いがあると考えられる。現在は「核家族」を基本の日本に比べて、中国の家族は複数の世帯から成る「複合家族」の場合が多く、血縁関係または婚姻関係でつながる親族も家族の範囲に入るのが特徴である。そのため、ほぼ夫婦・親子・兄弟の親しい人間だけを相手にする日本人より、中国人は疎遠な相手とも常に良好な人間関係を維持する必要がある。家族メンバー間の接触が多い中国の家庭では、親しい相手より、生活習慣・考え方が異なった疎遠の人間の間でトラブルが発生しやすく、謝罪行為が起きやすくなるのではないかと考えられる。

最後に、謝罪ストラテジーについてである。日中ともに謝罪用例が多く現れ、謝罪行為の典型的場面と考えられる「精神負担」についてのみ分析を行ったが、その結果、関係の親疎に関わりなく、日本ドラマより中国ドラマのほうが多種類のストラテジーを使っていることがわかった。その中で、中国ドラマでは「責任承認」、日本ドラマでは「明確な謝罪表明」がもっとも頻繁に見られた謝罪のストラテジーであった。つまり、同じ不快状況でも日中間で重要視されるストラテジーが異なるという結果を得た。この違いは、謝罪の受け手の間に日中で異なる「期待」が存在することを意味するのではないかと考えられる。相手の「期待」が異なれば、それに対応するストラテジーも変わる。日本人にとっての謝罪は「すみません」などの明

確な謝罪表明とほぼ同然で、それを言わない限り謝罪としては認められがたい。一方、中国人は「对不起」などの明確な謝罪表明をせずに相手との関係を修復することを試みる。太田(2000:192)は、「期待についての内容は文化間で異なることがあるので、結果的に誤解やコミュニケーション摩擦を誘発することがある」と言う。そのために、「明確な謝罪表明」にこだわる日本人の目から見ると、ほかのストラテジーを講じて関係修復をはかる中国人は「あまり謝らない」ように映るのも不思議なことではないと考えられる。

このように、本研究の出発点である「謝る日本人、謝らない中国人」という謝罪に関するステレオタイプに関しては、テレビドラマの分析からはそれを支持する結果が得られた。その背景となるのは、日中の謝罪の定型表現の多義性の有無ではないかと先行研究では指摘されていたが(高橋, 2012:4)、本研究の考察からは、謝罪の前提となる「不快状況」、また謝罪の手段としての「ストラテジー」についての認識の異なりが原因である可能性も示唆された。謝罪以外でも、注意喚起や依頼、感謝などの場合も相手との間にある種の不均衡が生じると把握する傾向にある日本人と比べ、中国人にとって注意喚起や依頼、感謝などは謝罪が必要とされる状況とは認めがたい。つまり、不快状況の範囲が中国人よりも日本人のほうが広いのではないかと考えられる。また、謝罪行為で好まれるストラテジーの違いは、関係修復の際の「期待」が異なることによると考えられる。このような言語行動に関する認識の異なりがあるため、「不快状況」の範囲が狭く、「明確な謝罪表明」を安易に発話しない中国人の目には、日本人はすぐに謝ってしまうと感じられる。一方、「不快状況」の範囲が広く、「明確な謝罪表明」にこだわる日本人の目には中国人はあまり謝らないと映るのであろう。

## 7. おわりに

本研究では、質問法ではなくテレビドラマの談話を資料として観察することで、より自然談話の研究に近い立場から、収集したデータに見られる謝罪の頻度および不快状況について、数量と質の両面から考察を行った。本研究の方法は、作為的な談話ではなくより自然な談話に近いデータを用いたことで、これまで取り上げられなかった「謝罪の頻度」および謝罪の誘因である「不快状況」を視野に入れることを試み、謝罪言語行動の研究の新たな展開の可能性を示すことにつながったと考えられる。その一方で、今回の調査で取り上げたホームドラマや収集できた謝罪談話の数も限られており、得られた結果が十分に一般化できるものかどうかの判断は、今後より多くの用例の収集と更なる分析を待たねばならない。

また、本研究を含めたこれまでの研究は、謝罪の送り手だけに注目し、相手が受け入れるか否かを考慮せず、送り手の言語表現や心理面を基準に謝罪言語行動を捉えるものが多い。しかし、謝罪は一人で行うものではない。謝罪をする側の言語行動だけでなく、相手の反応にも注目し、お互いのやりとりの中で考察することが今後の研究では重要だと考えられる。

## 参考文献

- 池田理恵子(1993)「謝罪の対照研究：日米対照研究：Faceという視点からの一考察」日本語学12(12), pp13-21。  
 王源(2009)「日中における謝罪行動の対照研究」東アジア日本語教育・日本文化研究12,

- pp223-236。
- 太田浩司 (2000) 「グループ間コミュニケーションアプローチ」『異文化コミュニケーション入門』創元社。
- 大谷麻美 (2008) 「謝罪研究の概観と今後の課題：日本語と英語の対照研究を中心とした考察」言語文化と日本語教育 (一), pp24-43。
- 北山環 (2014) 『ビジネス場面におけるポライトネスの考察：アメリカ・イギリス・日本映画に表れる依頼・対立・謝罪表現の分析』大阪教育図書。
- 熊谷智子 (1993) 「研究対象としての謝罪：いくつかの切り口について」日本語学12(12), pp4-12。
- 佐竹千草 (2005) 「日中語『謝罪』に関する一考察：母語話者の意識調査を通じて」聖心女子大学大学院論集 27(1), pp182-159。
- 真田信治 (2006) 『社会言語学の展望』くろしお出版。
- 杉戸清樹 (1992) 「言語行動」『社会言語学』桜楓社。
- 蘇娜 (2007) 「日中における謝罪表現の対照研究」愛媛国文と教育 (39), pp10-16。
- 高橋優子 (2005a) 「日本人と中国人のコミュニケーション方略に関して：『謝罪行為』に注目して」文化外国語専門学校日本語課程紀要 (18), pp49-56。
- 高橋優子 (2005b) 「日中の謝罪のコミュニケーション方略に関する一考察：『補償の行為の申し出と行為の実行状況』に着目して」異文化コミュニケーション (8), 221-238。
- 高橋優子 (2012) 「これまでの日中の『謝罪』表現研究の問題点と今後の課題」文化外国語専門学校紀要 (25), pp1-8。
- 趙翻 (2012) 「日本語と中国語における謝罪表現の対照研究：家族と親友間の異なりに注目して」東洋大学大学院紀要 (49), pp124-98。
- 趙翻 (2014a) 「日中3都市における謝罪行動：東京・大連・杭州における言語表現と地方差」東洋大学大学院紀要 (50), pp128-111。
- 趙翻 (2014b) 「日本語と中国語の謝罪の特徴：言語と家族観に注目して」言語文化学会論集 (43), pp19-37。
- 鄭加禎・上原麻子 (2005) 「謝る意識：中国人、日本人、台湾人の対照研究」ヒューマン・コミュニケーション研究 (33), pp 99-119。
- 鄭加禎 (2006a) 「謝罪表明義務感：日本と台湾の対照研究」社会言語科学 8(2), 43-52。
- 鄭加禎 (2006b) 「日台における謝罪意識の対照研究：状況および人間関係の作用」国際行動学研究 1, pp52-62。
- 鄭加禎 (2006c) 「謝罪行為における差異：日本語母語話者と中国語母語話者の事例研究」アジア社会文化研究 (7), pp57-73。
- 陶琳 (2005a) 「“对不起”と『すみません』について」比較文化研究 (69), pp97-108。
- 陶琳 (2005b) 「人間関係修復のための方略：謝罪表現を中心に」社会環境研究 10, pp33-45。
- 中田智子 (1989) 「発話行為としての陳謝と感謝」日本語教育68, pp191-203。
- ネウストプニー (2003) 『朝倉日本語講座9言語行動』北原保雄 (監修) 萩野綱男 (編集) 朝倉書店。

- 彭国躍 (1992) 「謝罪行為の遂行とその社会的相関性について：中日社会語用論的比較研究」  
大阪大学日本学報11, pp63-82。
- 彭国躍 (2005) 「現代日本語の謝罪発話行為の類型と機能」 日本語学 24(4), pp78-90。
- 茂呂雄二 (1999) 『対話と知：談話の認知科学入門』 新曜社。
- 山梨正明 (1986) 『発話行為』 大修館書店。
- 李竺楠 (2017) 「職場ドラマにおける謝罪表現の中日対照研究：『謝罪場面』と『謝罪頻度』を  
中心に」, 社会言語科学会第40回大会発表論文集, pp160-163。
- Brown, P. & S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge:  
Cambridge University Press. 田中典子 監訳, 齊藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山  
下早代子 訳 『ポライトネス：言語使用におけるある普遍現象』 研究社, 2011。
- Searle, John R. (1969) *Speech acts : an essay in the philosophy of language* : Cambridge University  
Press. 坂本百大・土屋 俊訳 『言語行為：言語哲学への試論』 勁草書房, 1986。
- Thomas, Jenny. (1995) *Meaning in interaction : an introduction to pragmatics*: Longman Press.

原稿受領日：平成29年 8 月31日；Received 31 August 2017

掲載受理日：平成29年12月 7 日；Accepted 7 December 2017